

トラウマ概念の再吟味

森 茂起

私の担当テーマである「トラウマ」の話をしめます。「トラウマ（心的外傷）」というテーマは、他の研究テーマと相互に密接に関連するテーマと考えています。「子育て」「感性」「心理療法」とも結びついていますし、「性差」「グローバリゼーション」「戦後効率主義」のテーマもトラウマのなかに組み込まれています。逆にトラウマの方も他のテーマに組み込まれています。トラウマに特別な関心を持っている者として、私自身はそんな感触を持って七つのテーマをながめています。

トラウマは、心理療法や心理臨床の世界で現在もっとも関心を持たれている問題のひとつです。特にこの関西地域では、阪神大震災という災害を体験したために、災害後の心のケア対策がずいぶん議論され、実践されました。実は、それが日本全体のトラウマ研究のスタート地点ともなりました。トラウマ研究がそれまでなかったわけではないとしても、わが国で学界全体として取り組まれたのは、阪神大震災に始まると言えます。今こそPTSDは誰もが知る名前になりましたが、大震災前に知る人はわずかでした。大震災は、長い歴史のなかで偶然この時代のこの地に起こり、それ以後の日本の臨床

心理学の議論を決定づけたのです。

それから八年、少年犯罪や無差別殺人、さまざまな事故や災害が起こるたびにトラウマおよびその対策としての心のケアに注目が集まりました。すぐに思い出せるだけでも、附属池田小学校事件や愛媛丸事件に際して、心のケアが問題にされ、今も問題にされ続けています。私自身関わるものが多く、最近特に深刻化しているのは児童虐待の問題です。震災や事故のような一回性のトラウマとはまた異なった、長期間にわたるトラウマがそこでは発生します。子どもの発達に深い影響を及ぼすトラウマとして注目され、児童虐待を防止するための対策が進められています。

歴史をさかのぼりますと、一九世紀末という時代がトラウマ研究の起点として浮かび上がってきます。震災後に出版されたさまざまな出版物に、一九世紀以来のトラウマ研究の詳細を知ることができます。一九世紀末は鉄道という交通手段が発達し、人類はその恩恵に浴しましたが、同時に鉄道事故というかたちで大量のトラウマが発生することにもなりました。また、ヒステリー症状の研究が一九世紀末に発展し、背後に子ども時代のトラウマを発見することで精神分析が誕生しました。一九世紀の終わり頃にトラウマ現象が一斉に注目されたことを見て取れます。これは非常に興味深い現象です。つまり、トラウマは、近代社会の発生とともに注目され、二〇世紀の近代社会のなかでトラウマ研究が進行していったのです。こうした時代の流れとトラウマ研究を関係づけて分析することは、トラウマ理解を深めるうえで重要な

テーマです。

しかしトラウマ学は、一九世紀末に始まり現在まで順調に発展してきたわけではありません。二〇世紀は、第一次大戦、第二次大戦という歴史上最大のトラウマを体験した時代です。しかし、一九世紀末に高まったトラウマへの社会的関心はむしろ衰退し、研究は先送りされてきました。終戦とともに、むしろトラウマを早く忘れ、平常の生活を取り戻すことが目指され、経済復興や生活の立て直しが優先されました。第一次大戦後のヨーロッパも第二次大戦後の日本もそうだったと思われまふ。戦後効率主義も、第二次大戦のトラウマを早く忘却して、アメリカのような豊かな生活を手に入れようという動機と無関係ではないでしょう。

トラウマへの注目と忘却の波が何度も襲った後、二〇世紀の終わりになって、特にアメリカを中心としてトラウマ研究が復興し、爆発的に広がっていきました。世界的趨勢としてトラウマに注目が集り、対策が進められました。歴史的にこれが何を意味しているのか。その成果に学ぶところはあれ、現在流行しているアメリカ的なトラウマ理解で今後トラウマは克服されていくのか、果して明るい未来が待っているのか、私は不安も感じています。個人的には、今後、日本でトラウマ対策を考えると、アメリカ的なものかどうかというスタンスでかわればいいのかが問われると考えています。

トラウマは、教育や福祉の領域、司法の領域、医療の領域、臨床心理の領域と、個々の領域の問題でありながら、思想的にも社会的にも広範な問題と結びつく大きなテーマです。ト

ラウマとはいったい何なのか、臨床領域に視野を限らず、大きな視野から捉えていくことが必要です。トラウマ概念の再吟味」という研究テーマのもとでは、この概念が思想的にどのような意味をもつか、臨床心理学で使ってきたトラウマ概念が概念としてどういう働きをするのか議論する必要があると考えています。

簡単にいうと、トラウマとは、私たち人間という主体を圧倒して、主体性を奪い、破壊してしまうほどの大きな力が外部から加えられたときの現象です。以後、その個人は、再び主体性を取り戻して生きることが極めて難しくなります。つまり後々に至るまでトラウマに振り回され、その影響下におかれるかたちでしか生きることができなくなってしまう。そういうものがトラウマです。そこから主体性をどうやって取り戻すかが当の個人にとって、そして援助者にとって課題になります。

ですから、トラウマは、主体とはなにか、あるいは心理学的にいえば自我や人格構造とはなにかという根源的な問いに関わるテーマだと思えます。臨床心理学の実践の現場で起こっている個々の事例と、巨視的なトラウマ理解を橋渡ししながら、両者に目を配り、研究を進めていきたいというのが今の私の構想です。今後、客員特別研究員の先生方にも甲南大学に来ていただいて研究会を開きながら、シンポジウムと出版の構想を練っていききたいと考えています。